

# 魅力ある垂水高校づくり 調査研究報告書

- ◎垂水市の生徒（平成22年3月卒業生）の進路状況調査により  
分析した特徴と垂水高等学校の振興策について
- ◎今後の少子高齢化を見据えた大隅地区の公立校の入学者定数  
への提言

～「なぜ垂水高校に進学する生徒が少ないのか？」

「少子高齢化の中で大隅地域の生徒の入学者定数はどうあればよいのか？」～

平成23年8月

「魅力ある垂水高校づくり」検討会議

# 目次

## I 垂水市の生徒（平成22年3月卒業生）の進路状況により分析した特徴と 垂水高等学校の振興策について

### ◆集約 分析した特徴と及び振興策について

テーマ1 垂水市の生徒は普通科・家庭科に入学することを避けているのか？

テーマ2 垂水市の生徒は普通科・家庭科に入学する生徒が少ないのか？

テーマ3 垂水市の生徒は私立の高校へ進学する生徒が多いのか？

テーマ4 垂水市の生徒は市外の学校へ行く割合が多いのはなぜか？

テーマ5 垂水市の生徒の高校進学の特徴は何か？

テーマ6 垂水市の生徒は普通科・家庭科はどこ地域の高校に進学しているのか？

テーマ7 垂水市の普通科希望の生徒はなぜ市外の普通科に行くのか？

## II 今後の少子高齢化を見据えた大隅地区の公立校の入学定数への提言

1. 大隅地区内の高校学校配置状況

2. 各高校間の距離・通学時間、通学費からの圏域の設定

3. 大隅地区内の生徒数の推移

4. 大隅地域内の高校別進学状況及び今後の予測

【提言】

---

## I 垂水市の生徒（平成 22 年 3 月卒業生）の進路状況により分析した特徴と垂水高等学校の振興策について

---

□分析に基づいた垂水高等学校の振興策に向けた考察について

[全体として]

①垂水市の普通科・家庭科に進む生徒の割合は県平均を上回っており、他の学科への進学もそれなりの理由(注 1)があるので、垂水市全体で「さらに普通科・家庭科に進む生徒を増やす」のは課題が残る。

(注 1)垂水市の特徴として農業系学科への進学が多く、また鹿児島市への通学が可能なことで進学の選択先が広いことがうかがえる。

[普通科について]

②普通科に進学する生徒を増やすために、高校の専門科系の学科に進む予定の生徒を受け入れるという考え方がある。このためには、垂水高校で学ぶ環境を準備すると同時に卒業後の専門学校・大学等において専門課程に進むための手立て(進路指導・大学進学費用助成等)が必要である。

③垂水市の普通科進学の生徒のうち、地域的に 34%が市内、それ以外の 66%の内訳は、大隅学区が 31%、新鹿児島学区が 27%となっており、市外の進学先は俗に言う”進学校”と呼ばれている高校に進学している生徒が多い。  
そこで、垂水高校でも”進学校”と同レベルの内容と実績を積み重ねる特進コース等の設置などにより、市外流出の生徒を確保する方法もある。

④垂水市の生徒の進学先で、専門科系では総合学科やその他(人間科学科等)に進学する生徒がいるので、この生徒たちの要望に応えられるような「普通科」としてキャリア教育・資格取得等に積極的に取り組み、アピールしていく必要がある。

[生活デザイン科(家庭科)について]

⑤垂水市の生徒の家庭科進学率は県平均よりも 3 倍もあり、これ以上の市内生徒の増加は生徒数が減少している関係でこれ以上望めない状況にあるが、「生活デザイン科」は全県区であることから、広く生徒が集まるようにさらに「魅力ある学科・高校」への取り組みが必要である。

⑥専門科から大学等への進学を考えている生徒を増やすためにも、進学支援体制をさらに進めアピールしていくべきである。

[垂水高校全体として]

- ⑦全体的な取り組みとして、さらに「魅力ある高校」としての評価を高めることにより、市内の生徒の確保を万全にしながらも、交通の便の良さを逆に利用し、広く市外から生徒が集まるような垂水高校となるための振興策と支援策が望まれる。

[参考意見]

- ・従来から、垂水高校の学科再編で看護系・福祉系学科の声があるが、県の進学先資料を見るとさほど需要はないと思われる。
- ・部活動の活性化による生徒増の声がある中、今回行ったアンケート調査でも「学校のイメージ」が選択の重要な要因であり、現在、垂水高校に対しては部活動を基準とした選択になっていない。このため、垂水高校の部活動については、マイナーな分野を選択してみるなど部活動の在り方を工夫していくべきである。

以上

## □集約 分析した特徴について

今回の 垂水市の生徒（平成 22 年 3 月卒業生）の進路状況により次ページ以降の 7 つのテーマを掲げ分析した結果以下のことが特徴として考えられる。

---

### テーマ 1

垂水市の生徒は普通科・家庭科に入学することを避けているのか？

---

■垂水市の生徒で普通科に進学した生徒は県平均より 4.6 ポイント低いが、それは地域性等により農業科や家庭科に進学しているからであり、垂水市の生徒が普通科を避けているのではない。

■垂水市の生徒で家庭科に進学した生徒は県平均より 11.3 ポイントとかなり高く、垂水市の生徒が家庭科を避けているとはいえない。

(結論)

垂水市の生徒の普通科と家庭科の進学率は 59.2% であり、県平均の 52.5% は大きく上回っているので、県教委は県全体を視野に入れ、生徒の進路選択の自由(市外への通学等)も斟酌すべきである。

---

### テーマ 2

垂水市の生徒は普通科・家庭科に入学する生徒が少ないのか？

---

■この節はテーマ 1 の内容を補完するためのものである。

■この節の比較表により、垂水市の普通科への進学者数は県平均とあまり変わらないのに垂水高校の普通科入学者が少ないので、市外の高校の普通科に進む生徒をどれだけ取り込むかが課題となる。

■しかし生徒の高校選択の自由を尊重し、市外からの入学者が増える「魅力ある高校」が必要となる。

■また、家庭科に進む生徒は県平均よりかなり多いが、垂水高校の定足数を満たさないのであれば、市外の生徒をどう引き付けるかが課題となる。

(結論)

垂水高校の生活デザイン科の地元進学率はかなり高率であり、垂水市の生徒は努力しているといえる。

---

### テーマ3

垂水市の生徒は私立の高校へ進学する生徒が多いのか？

---

- 垂水市の生徒の公立・私立高校への進学率は県平均とほぼ変わらない。よって、垂水市の生徒が特別に私立高校へ流れているわけではない。
- このことから、垂水市の生徒は県平均と同じくらい公立高校に入学しているのに、県全体を見ないで垂水高校の定足数だけを見るのは論外である。

---

### テーマ4

垂水市の生徒の高校進学の特徴は何か？

---

- テーマ3の結果から垂水市の生徒の公立・私立高校への進学率は県平均とほぼ変わらないが、垂水市の生徒が新鹿児島学区の公立高校へ通う割合が地区平均に比べて極めて高い。このことは垂水市の地域的特殊性として認識すべき。
- 同様に、垂水市の生徒が新鹿児島学区の私立高校へ通う割合が地区平均に比べて極めて高い。

(結論)

このように、垂水市の生徒が交通の便の良さから新鹿児島学区への進学が多く、このことはあえて地元の垂水高校に進まなくても鹿児島市の高校がさまざまな選択肢の対象となっている。

---

### テーマ5

垂水市の生徒は普通科・家庭科はどこ地域の高校に進学しているのか？

---

- ①垂水市の生徒で普通科に進学した生徒は地域的に34%が市内、それ以外の66%の内訳は、大隅学区が31%、新鹿児島学区が27%となっている。
- ②垂水市の生徒で家庭科に進学した生徒は地域的に73%が市内、それ以外の27%の内訳は、大隅学区が18%（4人）、新鹿児島学区が9%（2人）となっている。
- ③垂水市の生徒で高校に進学した生徒は地域的に26%が市内、それ以外の74%の内訳は、主に大隅学区が37%、新鹿児島学区が23%となっている。この3地域で86%を占めている。

---

## テーマ6

垂水市の生徒はなぜ市外の普通科に行くのか？

---

- ①垂水市の生徒で普通科に進学した生徒は地域的に34%が市内、それ以外の66%の内訳は、大隅学区が31%、新鹿児島学区が27%となっている。
- ②垂水市の生徒で市外に進学している生徒のほとんどは、俗に言う偏差値が垂水高校より高い"進学校"と呼ばれている学校である。
- ◆鹿児島市等への交通の便が悪ければ、この俗に言う鹿児島市内の"進学校"へ通学している生徒は垂水高校もしくは大隅地区の普通科に通っていた可能性がある。
- ◆しかし、鹿屋市以外の普通科に進学した子が大隅学区に帰ってくると仮定すると、鹿屋高校等の普通科の充足状況からして選択肢が狭まることが考えられ、垂水高校でも"進学校"と同レベルの内容と実績を積み重ねる必要がある。

【詳細分析・テーマ1】

垂水市の生徒は普通科・家庭科に入学することを避けているのか？

◎この節で何を言いたいのか。

■垂水市の生徒で普通科に行く生徒は確かに県平均より 4.6%低いですが、それは地域性等により農業科や家庭科に生徒が流れているからであり、垂水市の生徒が普通科を避けているのではない。

■垂水市の生徒で家庭科の学科を希望する生徒は県平均よりもかなり多く、垂水市の生徒が家庭科を避けているとは言い切れない。

(結論)

垂水市の生徒の普通科と家庭科の進学率は 59.2%であり、県平均の 52.5%は大きく上回っているので、県教委は県全体を視野に入れ、生徒の進路選択の自由(市外への通学等)も斟酌すべきである。

1. 平成 22 年度の高校入学者を高校の「大学科」項目ごとに分類した場合

【鹿児島県全体】

平成 22 年度	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	情報科	福祉科	その他	総合学
17,718	8,448	725	2,268	2,432	116	843	665	-	296	1,171	754
割合	47.7%	4.1%	12.8%	13.7%	0.7%	4.8%	3.8%	0.0%	1.7%	6.6%	4.3%
入学率順位	1	7	3	2	10	5	8	11	9	4	6

【垂水市／垂水中央中】

平成 22 年度	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	情報科	福祉科	その他	総合学
137	59	11	15	11	1	22	5	-	3	9	1
割合	43.1%	8.0%	10.9%	8.0%	0.7%	16.1%	3.6%	0.0%	2.2%	6.6%	0.7%
入学率順位	1	4	3	4	9	2	7	11	8	6	9

【分析】

- ①垂水市の生徒で普通科入学率は県平均より△4.6% (垂水市の実数で 6.3 人少ない)
- ②垂水市の生徒で農業科入学率は県平均より+3.9% (垂水市の実数で 5.4 人多い)
- ③垂水市の生徒で商業科入学率は県平均より△5.7% (垂水市の実数で 7.8 人少ない)
- ④垂水市の生徒で家庭科入学率は県平均より+11.3% (垂水市の実数で 15.4 人多い)
- ⑤垂水市の生徒で総合学科入学率は県平均より△3.6% (垂水市の実数で 4.9 人少ない)
- ⑥上記以外の工業科・水産科・看護科・福祉科・その他は、垂水市と鹿児島県全体との差はない。
- ⑦垂水市の生徒では、普通科の次に家庭科、工業科、農業科・商業科の順に入学率が高い。

※(参考)鹿児島県全体では、普通科、商業科、工業科、農業科の順に入学率が高い。

【考察】 \*この節はテーマ1の裏付け資料なので、考察はテーマ1と同一

- ①垂水市では普通科に進む生徒が、県平均より少ない。あと6人増えてもいい状態。
- ②家庭科を目指す割合は県平均よりもかなり高く、県平均 4.8%を垂水市にあてはめると 6.5 人であり垂水高校の生活デザイン科へ垂水市内入学者は 16 名であり県平均よりも家庭科への進学率が高い。
- ③垂水市の生徒が県平均よりも普通科・商業科・総合学科への進学率が少ない分、農業科・家庭科への進学率が高い。

【結論】

- ①垂水市の進学者のうち普通科への進学率が低いのは、その分地域の特殊性により農業科・家庭科に流れているためである。
- ②垂水市の家庭科への入学者は県平均よりも大きく、けっして垂水市の生徒が家庭科への希望が少ないわけではない。

(課題)

- ①普通科への進学率は県平均よりも少し低い程度だが、なぜそれが垂水高校へと流れていかないのか？  
⇒公立・私立別分類

【詳細分析・テーマ2】

垂水市の生徒は普通科・家庭科に入学する生徒が少ないのか？

◎この節で何が言いたいのか。

■この節はテーマ1の内容を補完するためのものである。

■この節の比較表により、垂水市の普通科への進学者数は県平均とあまり変わらないのに垂水高校の普通科入学者が少ないので、市外の高校の普通科に進む生徒をどれだけ取り込むかが課題となる。

■しかし生徒の高校選択の自由を尊重し、市外からの入学者が増える「魅力ある高校」が必要となる。

■また、家庭科に進む生徒は県平均よりかなり多いが、垂水高校の定足数を満たさないのであれば、市外の生徒をどう引き付けるかが課題となる。

◎結論

垂水高校の家庭デザイン科の地元進学率はかなり高率であり、垂水市の生徒は努力しているといえる。

1. 平成22年度の県の「大学科」別高校入学者を垂水市にあてはめる作業

【鹿児島県全体】

平成22年度	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	情報科	福祉科	その他	総合学
17,718	8,448	725	2,268	2,432	116	843	665	-	296	1,171	754
割合	47.7%	4.1%	12.8%	13.7%	0.7%	4.8%	3.8%	0.0%	1.7%	6.6%	4.3%
入学率順位	1	7	3	2	10	5	8	11	9	4	6

↓ 県の平均を垂水市の生徒数にあてはめると・・・

【垂水市の生徒に県平均を割り当てた場合/A】

平成22年度	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	情報科	福祉科	その他	総合学
137	65	6	18	19	1	7	5	-	2	9	6
割合	47.7%	4.1%	12.8%	13.7%	0.7%	4.8%	3.8%	0.0%	1.7%	6.6%	4.3%
入学率順位	1	7	3	2	10	5	8	11	9	4	6

【実際の垂水市（垂水中央中）の生徒の進学先/B】

平成22年度	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	情報科	福祉科	その他	総合学
137	59	11	15	11	1	22	5	-	3	9	1
割合	43.1%	8.0%	10.9%	8.0%	0.7%	16.1%	3.6%	0.0%	2.2%	6.6%	0.7%
入学率順位	1	4	3	4	9	2	7	11	8	6	9

◆BとAの差

平成22年度	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	情報科	福祉科	その他	総合学
差	▲6	5	▲3	▲8	0	15	0	-	1	0	▲5

**【分析】**

- ①垂水市の生徒は、普通科・工業科・商業科・総合学科の入学者数が県平均より少ない。計 21 人
- ②垂水市の生徒は県平均より農業科・家庭科・福祉科に入学した数が多い。計 21 人

**【考察】** \*この節はテーマ1の裏付け資料なので、考察はテーマ1と同一

- ①垂水市では普通科に進む生徒が、県平均より少ない。あと6人増えてもいい状態。
- ②家庭科を目指す割合は県平均よりもかなり高く、県平均 4.8%を垂水市にあてはめると 6.5 人であり垂水高校の生活デザイン科へ垂水市内入学者は 16 名であり県平均よりも家庭科への進学率が高い。
- ③垂水市の生徒が県平均よりも普通科・商業科・総合学科への進学率が少ない分、農業科・家庭科への進学率が高い。

**【結論】**

- ①垂水市の進学者のうち普通科への進学率が低いのは、その分地域の特殊性により農業科・家庭科に流れているためである。
- ②垂水市の家庭科への入学者は県平均よりも大きく、けっして垂水市の生徒が家庭科への希望が少ないわけではない。

【詳細分析・テーマ3】

垂水市の生徒は私立の高校へ進学する生徒が多いのか？

◎この節で何が言いたいのか。

■垂水市の生徒の公立・私立高校への進学率は県平均とほぼ変わらない。よって、垂水市の生徒が特別に私立高校へ流れているわけではない。

■このことから、垂水市の生徒は県平均と同じくらい公立高校に入学しているのに、県全体を見ないで垂水高校の定足数だけを見るのは論外である。

1. 平成22年度の高校入学者を高校の「大学科」項目ごとに分類した場合

【鹿児島県全体】 ※国立入学者は除く（教育基本調査に国立分がないため）

実数	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	福祉科	その他	総合学	総計
公立高校	6,088	725	1,833	2,000	116	559	64	104	635	468	12,592
私立高校	2,360	-	435	432	-	284	601	192	536	286	5,126
総計	8,448	725	2,268	2,432	116	843	665	296	1,171	754	17,718
割合											
公立高校	72.1%	100%	80.8%	82.2%	100%	66.3%	9.6%	35.1%	54.2%	62.1%	71.1%
私立高校	27.9%	-	19.2%	17.8%	-	33.7%	90.4%	64.9%	45.8%	37.9%	28.9%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

【垂水市（垂水中央中）】 ※国立入学者は除く（教育基本調査に国立分がないため）

実数	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	福祉科	その他	総合学	総計
公立高校	45	11	9	8	1	20					94
私立高校	14		4	3		2	5	3	9	1	41
総計	59	11	13	11	1	22	5	3	9	1	135
割合											
公立高校	76.3%	100%	69.2%	72.7%	100%	90.9%					69.6%
私立高校	23.7%		30.8%	27.3%		9.1%	100%	100%	100%	100%	30.4%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

【分析】

- ①垂水市の生徒で公立の普通科入学率は鹿児島県平均より+4.2%
  - ②垂水市の生徒で公立の家庭科入学率は鹿児島県平均より+33.6%
  - ③垂水市の生徒で公立の工業科・商業科への入学率は鹿児島県平均より約△10%
  - ④垂水市の生徒で公立の福祉科・その他・総合学科へ進む割合は皆無である。
  - ⑦垂水市の生徒は、普通科の次に家庭科、工業科、農業科・商業科の順に入学率が高い。
- 参考：鹿児島県全体では、普通科、商業科、工業科、農業科の順に入学率が高い。

### 【考察】

- ①垂水市では普通科に進む生徒が、県平均より少ない。あと6人増えてもいい状態。
- ②家庭科を目指す割合は県平均よりもかなり高く、県平均4.8%を垂水市にあてはめると6.5人であり、垂水高校の生活デザイン科へ垂水市内入学者は16名であり、県平均よりも家庭科への進学率が高い。
- ③垂水市の生徒が県平均よりも普通科・商業科・総合学科への進学率が少ない分、農業科・家庭科への進学率が高い。

地域の特殊性等により農業科・家庭科へ進学者が流れていることが分かる。

### 【結論】

- ①垂水市の進学者のうち普通科への進学率が低いのは、その分地域の特殊性により、農業科・家庭科に流れているためである。
- ②垂水市の家庭科への入学者は県平均よりも大きく、決して垂水市の生徒が家庭科への希望が少ないわけではない。

### (課題)

- ①普通科への進学率は県平均よりも少し低い程度だが、なぜそれが垂水高校へと流れていかないのか？  
⇒公立・私立・国立別分類

【詳細分析・テーマ4】

垂水市の生徒の高校進学の特徴は何か？

◎この節で何が言いたいのか。

- テーマ3の結果から垂水市の生徒の公立・私立高校への進学率は県平均とほぼ変わらないが、垂水市の生徒が新鹿兒島学区の公立高校へ通う割合が地区平均に比べて極めて高い。このことは垂水市の地域的特殊性として認識すべきである。
- 同様に、垂水市の生徒が新鹿兒島学区の私立高校へ通う割合が地区平均に比べて極めて高い。

【結論】

このように垂水市の生徒が交通の便の良さからも新鹿兒島学区への進学が多く、このことはあえて地元の垂水高校に進まなくても鹿兒島市の高校が様々な選択肢の対象となっている。

【平成23年3月大隅地域の中学校卒業者の進路状況／人数】

※資料：第1回大隅地域地区検討委員会 県資料より

公私	学区	垂水市	鹿屋市	東串良	錦江町	南大隅	肝付町	曾於市	志布志	大崎町	総計
公立	大隅学区	75	738	49	70	59	105	193	208	104	1,601
公立	新鹿兒島学区	13	28	1	1	7	3	5	6	2	66
公立	始良伊佐学区	5	9					22			36
公立	県内他学区	1	7	1		1			3	1	14
公立	県外		5	1				75		1	82
私立	大隅学区	12	209	3	13	7	42	20	78	27	411
私立	県内他学区	28	53		2	12	11	29	18	8	161
私立	県外	1	8		1		3	32	21	2	68
国立	高専	2	23		2	2	2	15	12	6	64
他	その他	4	37		2		5	13	11	4	76
中学校卒業生数		141	1,117	55	91	88	171	404	357	155	2,579
公立	旧曾於学区		16	6			4	188	145	43	402
公立	旧肝属学区	75	722	43	70	59	101	5	63	61	1,199

【平成 23 年 3 月大隅地域の中学校卒業者の進路状況／割合】

公私	学区	垂水市	鹿屋市	東串良	錦江町	南大隅	肝付町	曾於市	志布志	大崎町	総計
公立	大隅学区	53.2%	66.1%	89.1%	76.9%	67.0%	61.4%	47.8%	58.3%	67.1%	62.1%
公立	新鹿児島学区	9.2%	2.5%	1.8%	1.1%	8.0%	1.8%	1.2%	1.7%	1.3%	2.6%
公立	始良伊佐学区	3.5%	0.8%	0%	0%	0%	0%	5.4%	0%	0%	1.4%
公立	県内他学区	0.7%	0.6%	1.8%	0%	1.1%	0%	0%	0.8%	0.6%	0.5%
公立	県外	0%	0.4%	1.8%	0%	0%	0%	18.6%	0%	0.6%	3.2%
私立	大隅学区	8.5%	18.7%	5.5%	14.3%	8.0%	24.6%	5.0%	21.8%	17.4%	15.9%
私立	県内他学区	19.9%	4.7%	0%	2.2%	13.6%	6.4%	7.2%	5.0%	5.2%	6.2%
私立	県外	0.7%	0.7%	0%	1.1%	0%	1.8%	7.9%	5.9%	1.3%	2.6%
国立	高専	1.4%	2.1%	0%	2.2%	2.3%	1.2%	3.7%	3.4%	3.9%	2.5%
他	その他	2.8%	3.3%	0%	2.2%	0%	2.9%	3.2%	3.1%	2.6%	2.9%
計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
公立	旧曾於学区	0%	1.4%	10.9%	0%	0%	2.3%	46.5%	40.6%	27.7%	15.6%
公立	旧肝属学区	53.2%	64.6%	78.2%	76.9%	67.0%	59.1%	1.2%	17.6%	39.4%	46.5%

【分析】

- ①垂水市の生徒で大隅学区にある公立高校への進学率は地区平均よりも△8.9%
- ②垂水市の生徒で公立の新鹿児島学区の高校への進学率は、地区平均よりも+6.6%
- ③垂水市の生徒で大隅学区にある私立高校への進学率は地区平均よりも△7.4%
- ④垂水市の生徒で私立の県内他学区の高校への進学率は、地区平均よりも+13.7%

【詳細分析・テーマ5】

垂水市の生徒は普通科・家庭科はどこ地域の高校に進学しているのか？

◎この節で何を言いたいのか。

- ①垂水市の生徒で普通科に進学した生徒は地域的に 34%が市内、それ以外の 66%の内訳は、大隅学区が 31%、新鹿兒島学区が 27%となっている。
- ②垂水市の生徒で家庭科に進学した生徒は地域的に 73%が市内、それ以外の 27%の内訳は、大隅学区が 18%（4人）、新鹿兒島学区が 9%となっている。
- ③垂水市の生徒で高校に進学した生徒は地域的に 26%が市内、それ以外の 74%の内訳は、主に大隅学区が 37%、新鹿兒島学区が 23%となっている。この3地域で 86%を占めている。

【垂水市の生徒の地域別進学先状況／市内・市外・県外等】

区分	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	福祉科	その他	総合学	総計
市内	20					16					36
市外	39	11	14	11	1	6	5	3	8	1	99
県外			1						1		2
総計	59	11	15	11	1	22	5	3	9	1	137

【垂水市の生徒の地域別進学先状況／割合】

区分	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	福祉科	その他	総合学	総計
市内	34%					73%					27%
市外	66%	100%	93%	100%	100%	27%	100%	100%	89%	100%	72%
県外			7%	100%					11%		1%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

【垂水市の生徒の地域別進学先状況／市内・市外・県外等】

区分	普通科	農業科	工業科	商業科	水産科	家庭科	看護科	福祉科	その他	総合学	総計
市内垂高	20					16					36
大隅学区	18	11	6	4		4			8		51
新鹿兒島	16		4	7		2		2		1	32
始良伊佐	2		4				4	1			11
南薩学区					1		1				2
外その他	3										3
県外			1						1		2
その他											
総計	59	11	15	11	1	22	5	3	9	1	137



【詳細分析・テーマ6】

垂水市の生徒はなぜ市外の普通科に行くのか？

◎この節で何を言いたいのか。

- ①垂水市の生徒で普通科に進学した生徒は地域的に 34%が市内、それ以外の 66%の内訳は、大隅学区が31%、新鹿児島学区が27%となっている。
- ②垂水市の生徒で市外に進学している生徒のほとんどは、俗に言う偏差値が垂水高校より高い"進学校"と呼ばれている学校である。
- ◆鹿児島市等への交通の便が悪ければ、この俗に言う鹿児島市内の"進学校"へ通学している生徒は垂水高校もしくは大隅地区の普通科に通っていた可能性がある。
- ◆しかし、鹿屋市以外の普通科に進学した子が大隅学区に帰ってくると仮定すると、鹿屋高校等の普通科の充足状況からして選択肢が狭まることが考えられ、垂水高校でも”進学校”と同レベルの内容と実績を積み重ねる必要がある。

【垂水市の生徒の地域別進学先状況 市内・市外県外等】

区分	普通科	割合
市内	20	34%
市外	39	66%
県外		
総計	59	100%

区分／詳細	普通科	割合
市内 垂水高校	20	34%
市外 大隅学区	18	31%
新鹿児島学区	16	27%
始良・伊佐学区	2	3%
その他	3	5%
総計	59	100%

【普通科の進学先の状況】

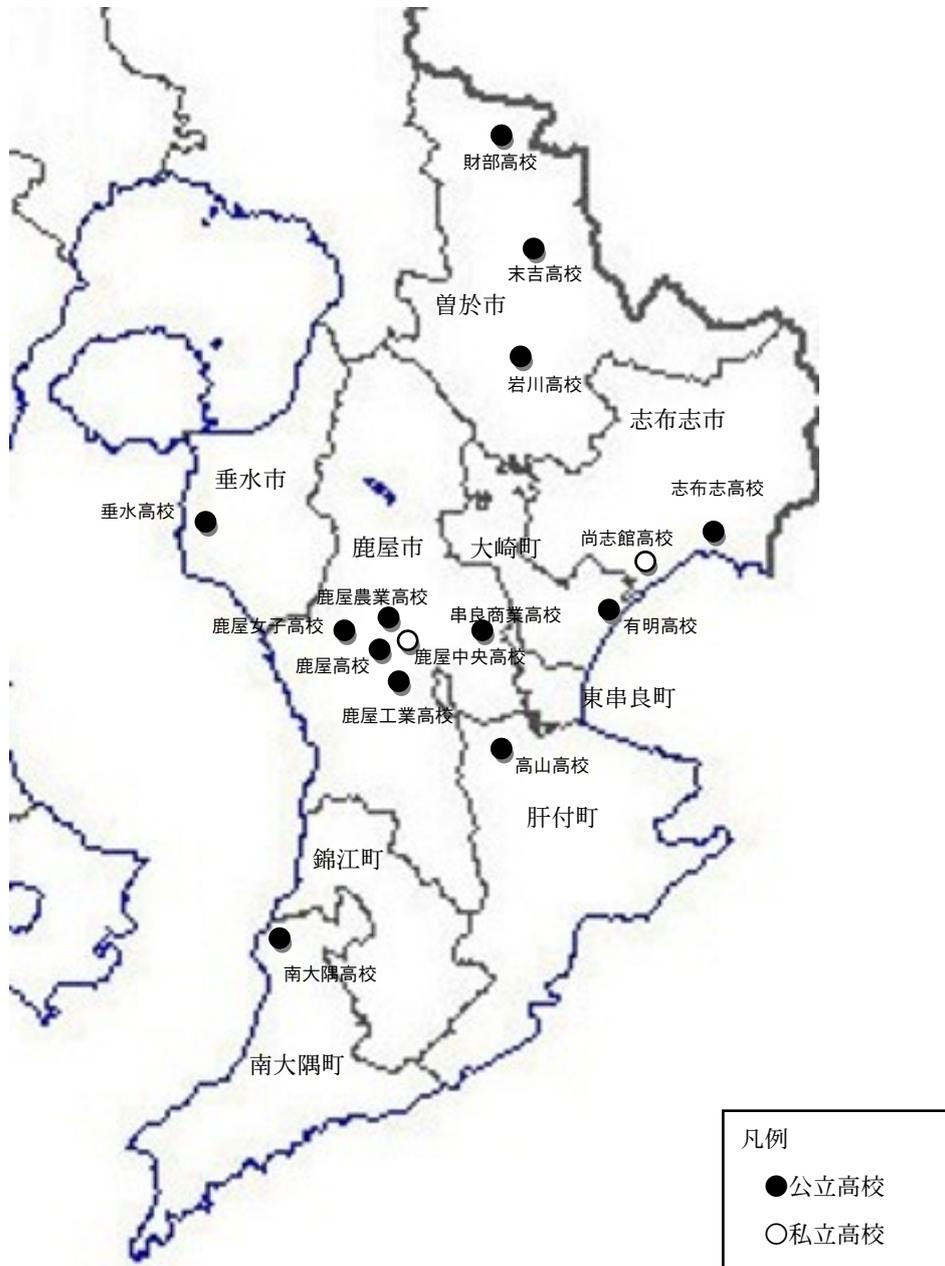
No.	公私別	学区	市内外	高校名	進学者数	学区計
1	公立	大隅学区	市内	垂水高校	20	20
2	公立	大隅学区	市外	鹿屋高校	12	18
3	公立	大隅学区	市外	鹿屋女子高校	4	
4	私立	大隅学区	市外	鹿屋中央高校	2	
5	公立	新鹿児島学区	市外	甲南高校	1	
6	公立	新鹿児島学区	市外	鹿児島中央高校	4	16
7	公立	新鹿児島学区	市外	鹿児島玉龍高校	2	
8	私立	新鹿児島学区	市外	樟南高校	1	
9	私立	新鹿児島学区	市外	鹿児島実業高校	2	
10	私立	新鹿児島学区	市外	鹿児島城西高校	2	
11	私立	新鹿児島学区	市外	鹿児島純心高校	2	
12	私立	新鹿児島学区	市外	鹿児島情報高校	2	
13	公立	始良・伊佐学区	市外	国分高校	2	2
14	私立	その他	市外	クラーク高校	3	3

## II 垂水高校が大隅地区内でどうあるべきかへの提言

この章では、大隅地域全体の地域振興、地域間格差是正の観点から、垂水高校がどうあるべきか、大隅地区の高等学校配置状況及び平成 31 年度までの生徒数の推移等を参考にしながら検討を行った。

### 1. 大隅地区内の高校学校配置状況

【図 1・大隅地区内の高校位置図】



## 2. 各高校間の距離・通学時間、通学費からの圏域の設定

### (1) 地域間格差の定義

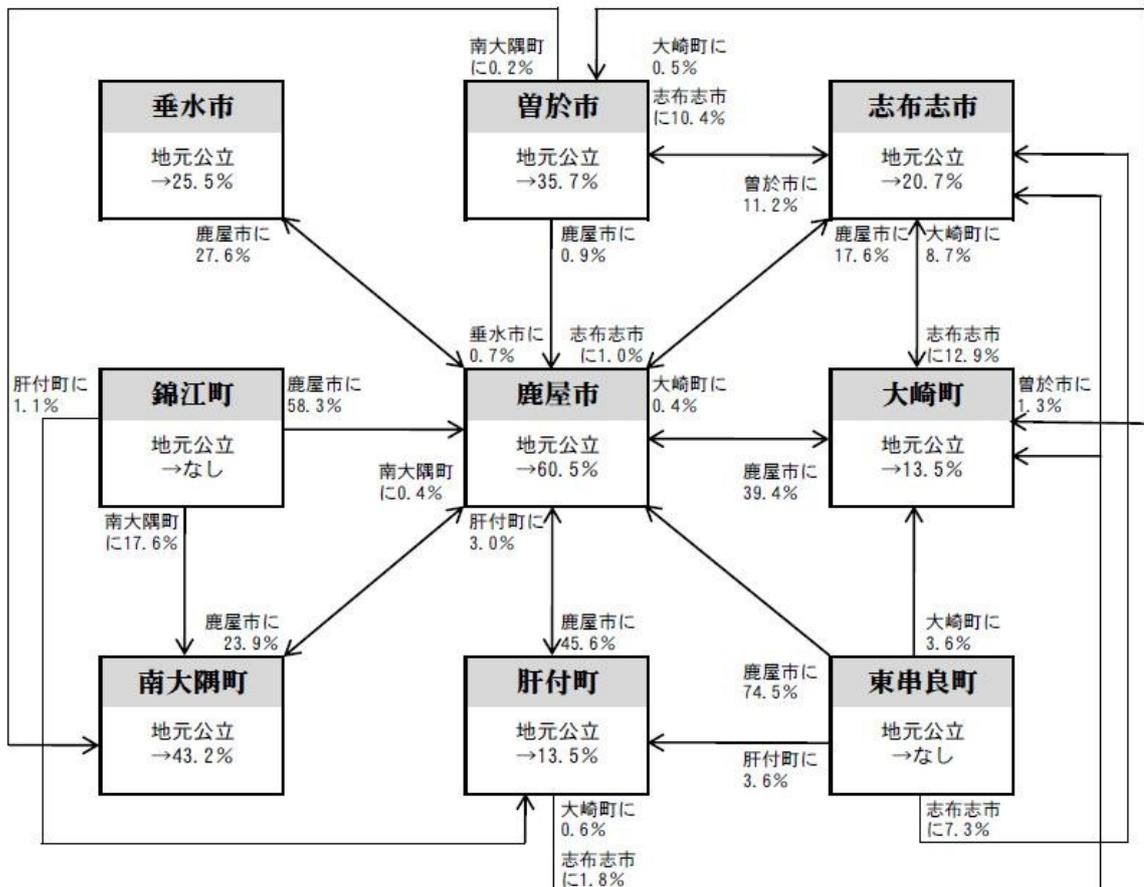
アンケート結果報告によると、高校選択の理由の中で高校生保護者の選択割合の高い項目が「経済的負担が少ないこと」であった。このことは、大隅地域内においても同様な傾向であることが予想される。

生徒が教育を受ける環境面からの視点で、地域間格差を通学時間や通学に係る経費と設定すると、これらの負担をできるだけ平準化するように大隅地域内の高校配置をすることで地域間格差の解消につながると思われる。

### (2) 市町ごとの地元高校及び他高校市町への進学率の状況

図2は、大隅地域内の市町ごとの地元及び他市町への進学率の状況であるが、垂水市は地元進学率が、単独校設置の市町の中で南大隅町に次いで高く、大隅地区内でも地元志向が高いことが伺える。しかし、他市町からの進学率が鹿屋市のみとなっており、大隅地域内から生徒を集めることが課題となっている。

【図2】大隅地域自治体ごとの地元及び他市町への進学率／委員会資料より



### (3) 通学費の状況

次に表1は大隅地域内の各役場を起点に各市町の高校（鹿屋市は鹿屋高校、曾於市は末吉高校を設定）までの1カ月の定期代を調査したものである。

大隅の拠点である鹿屋市への通学費は、金額の低い順に肝付町、大崎町、垂水市、南大隅町、志布志市、曾於市の順となり全て2万円以内であった。

一方、垂水高校への通学費をみると2万円以内が鹿屋市、南大隅町のみとなった。

なお、表中の網掛け部分は、図2の他市町への進学実績該当箇所である。

【表1】大隅地域内の各自治体から高校までの通学費の概算 単位：円

	垂水市 垂水高	鹿屋市 鹿屋高	南大隅町 南大隅高	肝付町 高山高	大崎町 有明高	志布志市 志布志高	曾於市 末吉高
垂水市		15,840	19,440	20,160	21,000	22,560	26,280
鹿屋市	17,760		15,960	9,900	16,680	18,240	20,640
南大隅町	19,440	15,960		19,680	23,640	24,960	26,280
肝付町	20,280	10,500	20,040		13,800	15,360	24,600
大崎町	20,040	14,040	21,000	12,600		10,500	23,760
志布志市	23,040	18,240	23,880	16,320	8,400		18,720
曾於市	24,360	19,080	25,200	21,840	22,920	14,880	

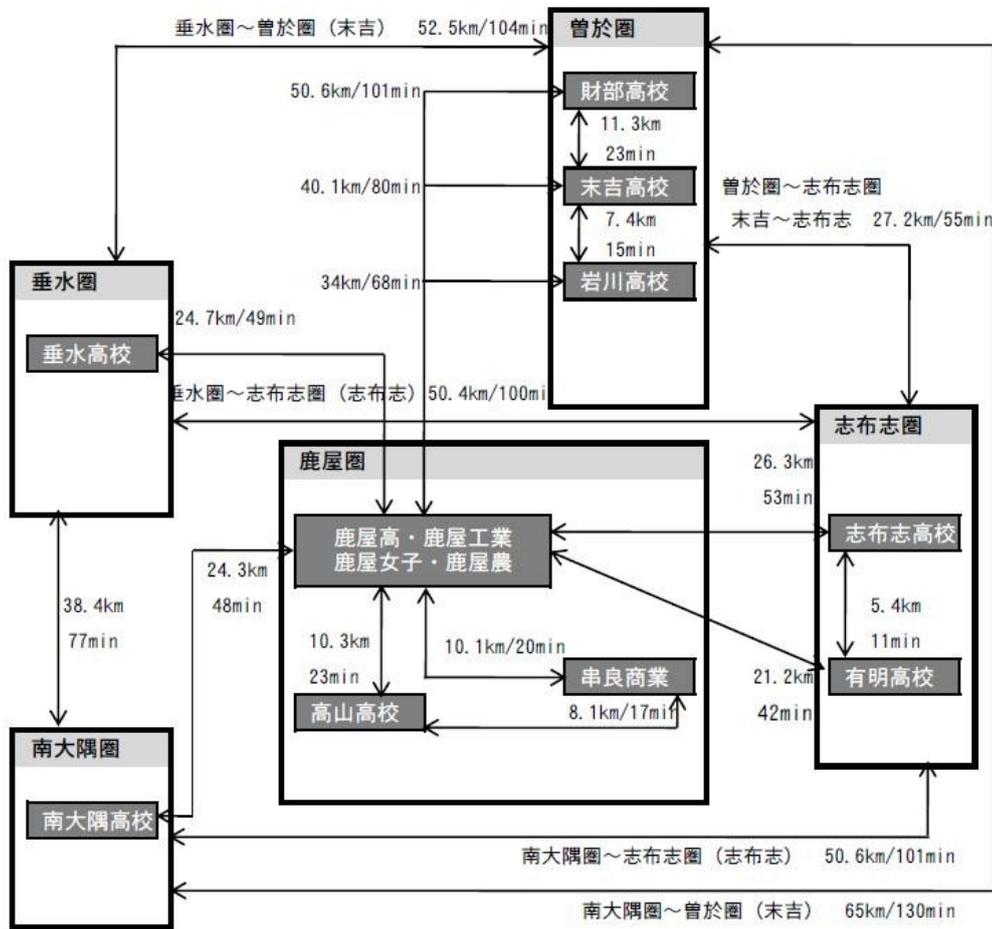
大隅交通ネットワーク株調べ

(4)まとめ／各高校間の距離・通学時間からの圏域化について

これまで検証した高校の配置状況、大隅地域内の進学状況、通学費の結果等を踏まえ、特に各高校間の距離や通学時間を考慮した形で圏域設定を行った。

圏域設定にあたっては、高校間の距離が概ね 30 分以内を一つの基準としたところ、図 3 のとおり、鹿屋圏を中心に垂水圏、南大隅圏、曾於圏、志布志圏の 5 つの圏域に分けることができる。

【図 2 ・ 圏域の設定】



### 3. 大隅地区内の生徒数の推移

【表2】 生徒数の推移／委員会資料

	卒業者 H23.3	中3年 H24.3	中2年 H25.3	中1年 H26.3	小6年 H27.3	小5年 H28.3	小4年 H29.3	小3年 H30.3	小2年 H31.3	小1年 H32.3	対H23増減	
垂水市	141	144	120	127	130	120	108	96	112	105	-36	
鹿屋市	1,117	1,088	1,092	1,047	988	1,062	1,085	1,087	1,026	1,071	-46	
東串良町	55	61	55	54	72	61	57	47	58	52	-3	
錦江町	91	69	77	83	58	69	60	77	70	53	-38	
南大隅町	88	58	82	58	60	60	57	50	48	55	-33	
肝付町	171	159	156	136	139	148	120	123	127	111	-60	
曾於市	404	341	367	324	325	308	285	282	270	257	-147	
志布志市	359	326	307	295	323	296	318	302	278	312	-47	
大崎町	155	140	123	123	116	111	104	108	106	102	-53	
地域計	人数	2,581	2,386	2,379	2,247	2,211	2,235	2,194	2,172	2,095	2,118	
	対前年度増減	-72	-195	-7	-132	-36	24	-41	-22	-77	23	
	対23.3増減		-195	-202	-334	-370	-346	-387	-409	-486	-463	
	指数	100	92.4	92.2	87.1	85.7	86.6	85.0	84.2	81.2	82.1	
県計	人数	17,130	17,055	16,753	16,417	15,987	16,206	16,005	15,640	15,437	15,142	
	対前年度増減	-1,332	-75	-302	-336	-430	219	-201	-365	-203	-295	
	対23.3増減		-75	-377	-713	-1,143	-924	-1,125	-1,490	-1,693	-1,988	
	指数	100	99.6	97.8	95.8	93.3	94.6	93.4	91.3	90.1	88.4	

#### (1) 少子化の現状

表2は、平成23年から平成32年までの中学校卒業生数の推移である。

垂水市は36名の減少、大隅地域は463人の減少、県においては1,988人の減少となるなど少子化が進むと予測されている。

この状況の改善は、他県からの転入増しか対応策がないことから、このことを認識しながら取り組んでいく必要がある。

#### 4 大隅地域内の高校別進学状況及び今後の予測

【表3】 高校別在籍状況及び今後の予測

市町名	学校名	小学科	大学科	H23年度 1年学級数・在籍者数														
				普通		家庭		農業		工業		商業		その他				
垂水市	垂水高校	普通	普通	1	23													
		生活デザイン	家庭			1	24											
鹿屋市	鹿屋高校	普通	普通	8	321													
	鹿屋農業	農業	農業					1	33									
		畜産動物学	農業					1	31									
		生物工学	農業					1	30									
		農業機械	農業					1	36									
		緑地工学	農業					1	30									
		生活	農業					1	40									
		鹿屋工業	機械	工業							2	76						
	電気		工業							1	40							
	電子		工業							1	40							
	建築		工業							1	32							
	土木		工業							1	21							
	鹿屋女子	普通	普通	2	73													
		商業	商業									1	24					
		情報処理	商業									1	34					
生活科学		家庭			2	57												
串良商業	情報処理	商業									2	66						
	総合ビジネス	商業									2	69						
肝付町	高山高校	普通	普通	2	61													
南大隅町	南大隅高校	情報処理	商業								2	61						
曾於市	財部高校	普通	普通	2	53													
	末吉高校	普通	普通	1	40													
		生物生産	農業					1	37									
		情報処理	商業									1	30					
岩川高校	普通	普通	1	39														
	電子機械	工業							1	36								
志布志市	志布志高校	普通	普通	4	156													
大崎町	有明高校	産業技術	その他												2	65		

	地域内生徒	地区進学者数	クラス計	普通科		家庭		農業		工業		商業		その他	
H23年度	2,591	1,678	49	21	766	3	81	7	237	7	245	9	284	2	65

【予測】

H27年度	2,222	1,439	43	19	657	2	69	6	203	7	210	7	244	2	56
-------	-------	-------	----	----	-----	---	----	---	-----	---	-----	---	-----	---	----

H31年度	2,095	1,357	41	18	619	2	65	6	192	6	198	7	230	2	53
-------	-------	-------	----	----	-----	---	----	---	-----	---	-----	---	-----	---	----

地域内進学率 64.76%

(1)平成 31 年度のシミュレーション

表 3 は、高校 1 年生における大隅地域内の高校在籍状況の実績である。

平成 23 年度は普通科と専門科をあわせて 49 クラスあるが、現在の地域内進学率を本年度の実績 64.76%を当てはめると、平成 27 年度は 43 クラス、平成 31 年度は 41 クラスとの見込みである。

(2) 学科設定について

近年は普通科へ進学する志向が強まってはきているが、それでも半数近くは専門系の学科へ進学している。高校単位で学科設定を検討しても、さきほどの予測にあったとおり、学級数の減少は避けられないところである。

このため、大隅地域の現状や発展していく方向性を踏まえると、特色ある学科の設置や圏域ごとに学級数を設定しておくなど対応を行う必要がある。

基本的な考え方の例を示すと普通科は、現状の学科設置状況から、垂水圏、鹿屋圏、曾於圏、志布志圏に設置する。なお、南大隅圏は専門科の商業系が設置されているが、地元の意向を確認する必要がある。

専門科は、圏域ごとに専門科を配置するなど工夫が必要である。例えば、農業科及び工業科は現状のとおり鹿屋圏に、家庭科は垂水圏に集約するなど、圏域ごとの特性を生かせるよう提案したい。その際は、大隅地域内の通学に配慮した形で学科設定を検討する必要がある。また、通学に要する経費の補助など大隅地域全体で協議していただきたい。

【表 4】本市が推奨する各圏域の学科配置の例

※数字はクラス数

	普通科	家庭科	農業科	工業科	商業科	その他	計
H23年度	21	3	7	7	9	2	49
垂水圏	1	1					
鹿屋圏	12	2	6	6	6		
曾於圏	4		1	1	1		
志布志圏	4					2	
南大隅圏					2		
H27年度	19	2	6	7	7	2	43
垂水圏	1	2					
鹿屋圏							
曾於圏	18	0	6	7	7	2	
志布志圏							
南大隅圏							
H31年度	18	2	6	6	7	2	41
垂水圏	1	2					
鹿屋圏							
曾於圏	17	0	6	6	7	2	
志布志圏							
南大隅圏							

### (3) 小規模校の特色について

本市が行ったアンケート結果から、垂水高校のよいところとして、「少人数であること」が上げられた。小規模校の利点としては、生徒同士だけでなく、先生とのコミュニケーションも取りやすく一致団結しやすい効果が期待できるが、一方で競争意識の欠如や教員が十分に配置できないなどの欠点もある。

生徒が高校教育を受ける環境は、学科だけでなく適正規模と言われる4～8学級の学校、反対に2～3学級の小規模校など、生徒自身が「どのような学校で学びたいか」といった選択肢を用意しておく必要があると思われる。

このため、小規模校の特色を生かし、また、欠点といわれる部分を地域内や近隣高校とのネットワークなどで補うなどの工夫を検討すべきと思われる。

## 【提言】

これまでの検証結果から、垂水高校は、大隅地域内において、どうあるべきか、次のように提言したい。

1. 大隅地域全体の均衡ある発展を目指すことを基本とし、学校配置や学科再編を検討すること。
2. 大隅地域内の距離的バランス、経済的負担の均衡から、垂水高校は垂水圏の拠点校として位置づけること。
3. 垂水高校は、垂水圏の普通科及び大隅地域内における家庭系学科（生活デザイン科）の拠点校とすること。